

新しい年の幕開けとともに古希を迎えることができた。同時に、66歳での会社人生のリタイア後、携わってきた夫婦間の紛争に係わるミッションも卒業である。昨今のコロナ禍の中で、在宅勤務の増加等の影響もあつてか、離婚事案が増加しているとも耳にする。正確な統計データではないものの、およそ三組に

ナビゲーター

一組が離婚するとも言われている。幸せ一杯で結婚したはずの夫婦間の感情が時とともに悪化し、もはや二人の関係は修復困難となった状況下で双方の話を聞いて、調停をすることになる。その際に最も肝要なこととはとにかく、お互いの気持ちや感情にしっかりと寄り添うことである。そして、一方の言っていることは矛盾しているな「おかしいな」と感じ

産業界の現場から 相談者の思いに 共感して伴走する

心の叫びを日からくみ取る

でも、こちらからは直截的な指摘はせず、また、誘導することも「法度」である。あくまでも双方の話を公平にかつ均等に聞いたうえで、当事者双方が納得することを目指すことにある。このミッションを通して学んだのは、まさに「人の話に丁寧に耳を傾ける」ことであつた。

そして、もう一つリタイア後にチャレンジしたことが「キャリアコンサルタント」である。チャレンジした動機の一つが、44年間勤めた会社人生に区切りを付けるにあたって、今までは異なる未知の分野に踏み込みたいと思つたことである。資格取得に向けた約3カ月強に及ぶ協会主催の講習通いにおいて、娘と同年代の人達とも机を並べて一緒に学ん

古希からの挑戦

だときは、会社入社したての頃の様な緊張感や高揚感が蘇つたことが忘れられない。同時に、心の中に残存する僅かばかりのプライドが首をもたげたことも事実であつた。

キャリアコンサルタントとしてのキーワードもやはり「傾聴」の言葉に尽きるといっても過言ではない。その言葉の響きは、我が会社生活時代、「いつも上から目線」で相手に対峙（じ）してきた者にとって、未だに心身ともに完全に体得するまでには至っていないと言わざるを得ない。しかしながら、「こうあるべきだ」等の主観的な意見は言わず、当事者の「自己判断」「気づき」に任せることが

は夫婦間の調停時における場合とやはり同様であり、その4年間の歩みは即ち、キャリア

コンサルタントとしての研鑽を積み重ねてきた道のりともいえる。そして、当事者の話しを聞くときに重要なポイントの一つが相手の目としっかりと合わせることである。「目は口ほどにものを言う」という格言がある。「傾聴」がすべての基本であるが、同時に言葉では言い表せない「心の叫び」を日からくみ取ることができると信じている。

「古希からの挑戦」とは社会に出てからの約50年弱のキャリアを活かして挑むという大上段に構えたタイトルであるが、今や「人生100年時代」。まだまだ学ぶべきことの多い人生において、限りなき挑戦の第一歩でもあると言ひ換えた方が的を得ているかもしれない。

【日本産業界力カウンセラー協会中部支部会員
国家資格キャリアコンサルタント 小池潤】

(火曜日掲載)

